

第4回改訂検討委員会における意見の反映状況について

資料3

章・項目	カテゴリー	委員会でのご意見	素案 ページ	反映状況
第1章				
第2章	1(現状認識)	近頃の「原油」高騰が産業界に与える影響は非常に大きいと思う。特に製造業については、なかなか価格転嫁ができず、経営が非常に厳しくなっている。現状認識として、エネルギーの高騰に触れる必要がある。	P 7	第2章1.産業を取り巻く社会・経済情勢(4)加速する経済のグローバル化の箇所新たに、「原油価格高騰による中小企業へ影響」ならびに「循環資源海外への流出が拡大が深刻化」について現状認識を追記することとしました。
		「原油」については、先物取引が上昇しており、今後価格が下落することはなかなか考えられない状況。2010年の滋賀県産業を展望した本指針においては、確かにこの原油の高騰は大きな課題となると思うので、第2章にしっかりと記載する必要がある。		
		「レアメタル」については一時の暴騰からは落ち着きましたが、なかなか価格転嫁ができない状態である。今後はこのような論議をなんらかの形で国などに提起をしていくという視点が指針の中にあってしかるべきではないかと思う。		
		第1～3章については、「ワークバランス」や「グローバルバランス」、「エネルギー問題」について、どのようにとんがりを見せるかが重要。今の時代はスピードが非常に速い時代となっている。色々な政策を検討しても、政策が時代のスピードに追いつかないということもある。「時代のスピードが非常に速くなっている」ということも、しっかりと指針の最初に載せる必要がある。そして、その様な課題をしっかりと踏まえて、第4章につなげていく必要がある。	P 3 1	第2章の現状認識と課題を踏まえ、今後3年間の取り組みとして第5章「重点的に取り組む戦略」として具現化を図ることとしました。
		「グローバル」と「ローカル」が切り離されており、中小企業がなかなか伸びていないという認識をきっちりと押さえておく必要がある。資料2 P 6のグローバル化の箇所に、グローバル経済とローカル経済のズレについて、しっかりと明記する必要がある。	P 1 4	第2章「3.本県産業の課題」の(3)「産業競争力向上のための基盤技術の構築」において、グローバル化における切り離せないローカルへの影響について記述することとしました。

章・項目	カテゴリー	委員会でのご意見	素案 ページ	反映状況
第2章		グローバル経済について、地域資源の集積をどのように創っていくのかが1つの問題であり、ローカルの魅力を向上することで、地域を活性化させる取り組みも必要となります。例えば、まちづくりなどの取り組み。		
		大学との連携とは、技術的にお金や特許に繋がるものだけではなく、地域を広い意味で活性化していくような土壌づくり、相互扶助のネットワークをつくっていくということでも大学と地域の連携はあり得ると思う。	P 20	第4章2(1)で、企業が産学官金連携に取り組みやすい環境づくりの中で、技術開発を主とした連携から地域活性化を図るための連携など幅広い連携の推進について明記することとしました。
		産学官連携は大変重要なことであるが、滋賀県はコーディネート機能が非常に弱いと思う。県は連携が上手くいっていないデータをしっかりと集めていないのではないか。県はしっかりとうまくいっていない事例をつかんで今後の展開に役立てる必要がある。	P 20	第4章2(1)で、過去の調査結果等を踏まえ、産学官金連携のすそ野の拡大を図るため、企業が取り組みやすい環境づくりについて明記しています。
第3章	基本的視点(3)	「環境に配慮した」というよりは、「環境時代にふさわしい」「循環を前提とした」経済の発展という捉え方が適切ではないか。環境は経済の外のものということではないと思う。	P 17	第3章2基本視点(3)の趣旨は、産業活動と環境への配慮が相反するものではなく、内包して、相乗していくことであることから、項目および内容を「環境に配慮した…」を「環境と共存する…」に修正しました。
	基本的視点(3)については、「環境に配慮した」という表現になっているが、環境に配慮することは企業にとってコストがかかることと受け取られることから、そうではなくて、環境と共存することで、環境を利益の源泉にするという視点が必要と考えるので、表現の工夫を検討が必要である。			
	今の基本的視点(3)については、経済と環境保全がバッティングした視点で書かれているように思うが、経済が環境を内部化して、お金儲けの手段に使っていくという発想にすれば、戦略も大分変わってくるのではないか。			
		客観的な視点から、琵琶湖についての記述が全然出てこないこと。県外者から見ると、「滋賀県＝琵琶湖」であるが、滋賀県の最も大きな特徴である琵琶湖をどのように活かして産業振興を進めていくのかがよくわからない。琵琶湖があるからこそ、環境に関する産業が生まれているのだと思うが、それを指針のどこかに入れることで、県外者から見ても非常に分かりやすいものになる。	P 16 P 28 P 41	第3章1基本目標や第4章4の(3)ならびに第5章6の「観光産業の振興」において、「本県ならではの特性である自然、歴史、文化等の具体かつ代表的なものとして、琵琶湖を明記しました。

章・項目	カテゴリー	委員会でのご意見	素案 ページ	反映状況
第4章	1(1) - 特区	経済特区制度について、「着実な推進」という文言があるが、現在の状況はどうなっているのか。「着実な推進」という文言で、その取り組みが抱えている課題の解決などの取り組みから逃げているような感じを受けるが、現在の経過などについてしっかりと指針に盛り込んだ方がいいのではないか。	P18	第4章1(1)で、特区制度は新規成長産業の育成・振興のための重点プロジェクトであることから、本プロジェクトの目指すべき目標を明記しました。
第4章	2(1) - 連携	産学官金連携ということで、金融機関の「金」を入れたのは新しいと思う。しかしながら、中身は今までとはあまり変わりが無いので、「支援ネットワークをつくる」ということをもう少し強化すればどうか。また、広域的なネットワークが構築できないかということ。マッチングについても、広域的なネットワークが必要である。	P20	第4章2(1)で、産学官金連携のための支援機能は、一定充実してきていることから、それらの機能を効果的に活用し得る支援のネットワーク化の推進について明記しました。
	4(1) - 地域資源	滋賀県には地域資源がたくさんあると思う。例えば「おいしい水をつくるプロジェクト」などのようにわかりやすく表現をして欲しい。	P31	第5章「重点的に取り組む戦略」について、具体化を図ります。
	4(2) - 商業・サービス業	やはり事業者の立場・視点となっているように思う。消費者の視点からは、生活水準の向上が求められている。その様な視点から見たときに、消費者の周辺にそれを満たしてくれる商業事業者やサービス事業者がいないということが、地域産業の衰退や中心市街地の衰退に繋がっているということがいえる。やはり指針としては、生活水準の向上を支える産業として育成するという方向性、グレードアップするというか高いニーズに応えられる中小企業や商業事業者などを育てると言う方向性が必要だと思えます。	P26	施策展開については、中心市街地のにぎわいと住民が快適に生活するための機能の復活をめざした総合的な施策展開が必要との観点から、まちづくりにつながる展開方策を提案することとしました。
		<p>「地域に根ざした産業の振興」は、内容はよくなったが、タイトルの付け方が従来の産業の論理の上での付け方になっているように思う。</p> <p>衰退していく地域やそこで暮らしていく人の生活を支えていくためのインフラとしての商店街や地域の産業があると思う。大金を儲けるようなものではなく、ここでつがなく暮らしていけるためのインフラとしての商店街が欲しいというのが、まちづくりをしている人たちの思いだと思う。</p> <p>地域の人々の生活があって、それを支えるためのインフラとしての商店街という視点を素案に入れてもらって、タイトルなどに反</p>	P26	タイトルについては、商業・サービス産業の振興を第4章の中心と位置づけるとともに、4(1)のタイトルについて、まちづくりと一体となった取り組みが基本との観点から、「地域の特性を活かした多様な商業・サービス産業の振興」から「地域コミュニティと一体となった商業・サービス産業の振興」に修正することとしました。

章・項目	カテゴリー	委員会でのご意見	素案 ページ	反映状況
第4章	4(3) - 観光	観光による地域振興は、従来のマス・ツーリズムが地域社会に入っていった、結局地域社会をダメにしていくということがある。そのためにも、地域の生活をどのように支えていくのかという視点が必要。	P 28	第4章の4「地域に根ざした産業の振興」全体を通して、コミュニティと一体となった推進を前提と考えており、観光においても同様の観点で考えております。
	(全体)	地域社会については、そこで生産し、そこで消費している人たちのコミュニティということなので、ステイクホルダー(企業を取り巻くあらゆる利害関係者)自身としてのコミュニティについて考えると、構造を変えていくことが必要となる。 また、よそから来て地域に活力を与えてくれる、あるいはないものがあれば誘致することで、地域社会というものは変わっていくと思う。 もう一つは、何か形にしていくためのとんがりをどこに持たせるのかということが重要になってくる。	P 26 P 39	第4章の4において、全体を通して、コミュニティと一体となった取り組みの展開を前提と考えており、その上で、第5章において具体的な展開を戦略として明記することとしました。
		新産業創出については、イノベーションのようなことが必要。新しいイノベーションを進めながら、地域という一つのステイクホルダーの構造を変えていくことで生まれてくる環境成長経済が未来をつくっていくということを、如何に指針で見せていくかが重要となる。その様な新鮮味と言いますか、良い意味での刺激をこの指針の中で表現できればと思っている。	P 17	環境面については、第3章において、産業振興の前提となる推進の視点に明記しています。
第5章	1 - ブランド化	ブランドは、地域の付加価値を上げるということは非常に重要なツールだと思う。そこに住むことでどれだけレベルの高い暮らしが実現できるかということであるが、地域の価値に関連する。実はこのことが企業の支援にも繋がる。従業員の生活の質の向上は、企業誘致の際に非常に鍵になる。企業の従業員が「生活の質が落ちるから滋賀県には住みたくない」ということにならないように、色々な取り組みをすることが、今後の産業政策の方向性ではないかと考える。	P 16 P 27 P 31 P 37	県民の豊かな生活の実現については、まず、第3章基本目標や基本的視点に掲げ、全体の方向性を明確にしたうえで、第4章や第5章において、基本方向に沿った施策展開の中で明記しました。
	6 - 観光産業	観光については、来年の観光白書では「環境と観光」がキーワードになる。環境を観光の中に組み込んでいけばよい。もう一つはビジットジャパンということになるが、是非環境を観光の取り組みに入れていただければと思う。	P 28 P 41	

章・項目	カテゴリー	委員会でのご意見	素案 ページ	反映状況
第5章	6 - 観光産業	<p>「滋賀の歴史や自然を活かした観光産業の展開」の内容については、全国どこでも同じような内容になると思うので、水や琵琶湖にもっと特化してもいいと思う。</p> <p>成功する観光資源とは、地域でしっかりと根付いているものが多い。香川のさぬきうどんが全く隠れていたことと同じだと思いますが、県民が当たり前のように琵琶湖や水とつきあっているということを発掘して、観光につなげ、発信していくことも必要。</p> <p>観光は外からのマス・ツーリズムに消費されないということが大事。そのためには、地域における担い手が必要。また、このような観光にこそ、コミュニティ・ビジネスが必要なのではないかと思うのです。指針素案では、コミュニティ・ビジネスは中心市街地活性化のところだけであるが、地域の生活を支えていくための1つの方法としてコミュニティ・ビジネスを取り入れていくことは大いにあり得る。地域が外の理論に振り回されてしまうと、ニューツーリズムのような取り組みはダメになってしまう。地域社会の生活者の視点から見ると、第5章の</p>	P 27	<p>環境については、全体を貫く基本視点であり、第4章4の(3)ならびに第5章6においては、本県の特性を活かした魅力ある観光の展開ということで、本県の自然や琵琶湖をフィールドに、癒しに繋がる要素も加えた滋賀ならではの観光の展開を明記しています。</p> <p>第4章の4「地域に根ざした産業の振興」は、まちづくりと一体となった取り組みを基本とし、コミュニティビジネス的手法の活用は不可欠と考えていることから、4章全体を貫くものとして、4(1)に集約的に明記することとしました。</p>
第6章	3推進体制	<p>主体となる中小企業者が、この指針にどのように関わるのかということが、推進体制のところで見えてこない。</p>	P 48	<p>第6章3において、現行指針で実施、機能している評価・検証のスキームの継承を基本に考えています。</p>
総括	環境と経済の両立/ブランド化	<p>事業を繋げて相乗効果を生み出すような仕組みづくりや環境づくりが大事。結局経済を活性化させるということは、住民の生活の質を向上させることであり、環境を良くすることなので、根本では繋がっていると思う。環境と経済の両立というか、どちらもうまくいくように進めていかなくてはいけない。</p> <p>そこで、地域ということに立ち戻ると、滋賀のブランドをつくるのが大事。素案については、ブランドに繋がっていくような形でまとめていただけたらと思う。</p>	P 16 P 17	<p>ブランド化については、本県産業が成長・発展していくための目標の具体化であることから、第3章の基本目標に明記しました。</p> <p>また、経済と環境の両立は、基本的視点(3)において、「と環境と共存する……」という表現に修正しました。</p>